博士論文要旨

清原宣賢遺文による日本漢字音の位相論的研究

広島大学大学院　教育学研究科
文化教育開発専攻　国語文化教育学分野　博士課程後期

D140488　坂水貴司

１．本研究の目的

日本漢字音史研究は、平安鎌倉時代を対象範囲として行われてきた。そのため、室町時代の日本漢字音を体系的に取り扱った研究は、なされていない。この要因の一つに、室町時代の字音資料の紹介が進んでいないことがあると考える。従来、未公開の資料を参照するには、原本を調査する必要があった。しかし現在、各大学図書館・文庫・研究所などにより、インターネット上に古写本の画像が公開されるようになり、室町時代の古写本を手軽に使用できるようになった。かつて公開されていなかった資料も大量に公開され、室町時代の日本漢字音研究の研究環境が整っている。

ただし、室町時代の日本漢字音の全体像は、現在のところ明らかになっていない。そのためその全体像を把握するためには、その資料選択が重要となる。

室町時代における、異なった種類の代表的資料をいくつか選択し、その漢字音を記述することも、一つの方法である。しかし、この方法では、異なった資料間に見られた多様性が、文献を作成した個人による違いであることが否定できない。また、室町時代の字音資料は、その資料の作成者を含めた資料の情報が十分に検討されていない場合が多く、代表的資料を選択するにも、その資料選択の基準を立てること自体、難しい状況である。

全体像を把握するための方法として、一個人の資料を使用する方法が考えられる。一個人の資料に限定して、そこに見られる漢字音を記述する方法である。この方法は一個人の資料に限定するために、一時代資料としての代表性があるとは考えられない。しかし、一個人の資料において多様性が見られた場合、個人差であることが否定できる。また、室町時代の研究における第一歩として一個人の資料を選択した研究を行えば、その記述を基準として、他の個人が遺した文献の研究へと発展させることができる。本研究は、この方法を採る。

本研究では、対象とする一個人として、室町時代中期から後期の学者、清原宣賢（1475-1550）を選択する。

清原宣賢遺文には抄物だけでなく、訓点資料も豊富に遺る。また、字書も複数作成している。宣賢は養子として清原家を継ぐものの、生まれは卜部家である。そのため、訓点資料・抄物は漢籍関連のものに限らず、国書関連のものも多い。神道の行事次第や祭文のような資料も書写している。このように、宣賢の資料は多様性に富んでおり、一個人を選択しながらも、かなり多様な資料を参照することが可能となる。

本研究は言語の研究を目的とする。しかし、清原宣賢の抄物に対しては、学問史的な視点からの研究も多い。清原宣賢の漢字音を記述し、文献ごとの漢字音の多様性を指摘できたならば、そのような学問史的研究にも、寄与できる可能性がある。

本研究は、清原宣賢一個人の遺文を対象として、その一個人の漢字音を記述するとともに、一個人の遺文に見られる多様性を指摘することを目的とする。

２．本研究の方法

本研究は、体系的記述（第一部）と、位相論的研究（第二部）の、二つの方法により行う。

（１）体系的記述

体系的記述では、清原宣賢遺文のみを対象資料とし、その字音点から字音体系を帰納する。この体系的記述では、清原宣賢遺文全体を資料種ごとに分けることなく、一括して扱う。

全体を一括して扱うのには、次のような理由がある。まず、各資料から推定される字音は、資料間で多くの点が共通する。そのため、個々の資料ごとに記述を行うと、多くの記述が重複してしまう。また一括して扱うことで、記述に際し、あらかじめ決めておいた観点に縛られる必要がないため、一個人内における違いを、様々な観点から考察することが可能となる。

資料全体を一括して扱ったとしても、一個人内の多様性を認めないわけではない。一括して扱うこ

とによって、複数資料を同時に眺めることが可能となる。並行的に眺めることによって、かえって一個人内の多様性が見えやすくなると考える。

体系的記述での対象資料は、清原宣賢遺文の一部に限定して扱い、対象とする文献の字音点全てを扱う。一部の資料には別筆による書き入れが多く加えられている。中には別筆かどうかの判断が難しいものも存するため、信頼できるいくつかの資料に限って記述を行うのが安全であると考える。

（2）位相論的研究

位相論的研究では、清原宣賢遺文の中における字音の位相差を記述する。体系的な記述とは対照的に、位相論的研究で対象とするのは個別的事象が中心である。

体系的記述ではいくつかの文献に対象を絞った。一方、位相論的研究では体系的記述では扱わなかった清原宣賢遺文の多くも対象とする。また清原宣賢の資料を中心とするものの、キリシタン資料や抄物、古字書などを含む室町時代の諸資料も対象とする。

清原宣賢遺文に限らず、広く室町時代の資料を参照するのは、清原宣賢遺文における位相差を、室町時代全体の中に位置づけるためである。またキリシタン資料を利用することによって、音価推定が容易になることも、広く資料を参照することの利点である。

３．本研究の構成

本研究は研究篇と資料篇からなる。資料篇は、研究篇第一部で扱った諸資料の統合分紐分韻表である。以下、研究篇の構成を示す。

序章
　第一節　従来の研究
　第二節　本研究の目的
　第三節　本研究の方法

第一部　清原宣賢遺文による日本漢字音の体系的記述
　第一章　声母の体系
　　序節
　　第一節　唇音
　　第二節　舌音・半舌音
　　第三節　歯音・半歯音
　　第四節　牙音
　　第五節　喉音
　　第六節　声母のまとめ
　第二章　韻母の体系
　　序節
　　第一節　無韻尾・母音韻尾
　　第二節　-m 韻尾・-p 韻尾
　　第三節　-n 韻尾・-t 韻尾
　　第四節　-ŋ 韻尾・-k 韻尾
　　第五節　韻母のまとめ
　第三章　声調の体系
　　序節
　　第一節　清原宣賢遺文における声点と中国語中古音調類との対応

第二節　清原宣賢遺文における漢音声調の調値体系
第四章　第一部のまとめ

第二部　室町時代における日本漢字音の位相論的研究――清原宣賢遺文を中心に――
第一章　清原宣賢加点漢籍訓読資料における字音点の多様性
第二章　清原宣賢遺文における呉音・漢音・鎌倉宋音
第三章　清原宣賢遺文に見る漢音形の衰退について
第四章　室町時代における「数」の漢音形について
第五章　一個人内における ㆑ 入声音の位相差――「一」「七」「八」「實」について――
第六章　第二部のまとめ

結章

４．論文の概要

第一部　清原宣賢遺文による日本漢字音の体系的記述

第一部では、清原宣賢遺文から訓点資料６点と、抄物４点を選択して、中国語中古音の体系と対照させながら、体系を記述した。体系の記述には漢音体系を基準として、漢音体系から外れる例について、呉音・鎌倉宋音に位置づける。

第一章　声母の体系

第一章では、清原宣賢遺文における字音点の頭子音を、中国語中古音声母と対照させた。

対照の結果、中古音声母と、清原宣賢遺文における頭子音との原則的な対応状況は、平安鎌倉時代との相違はないと考えられる[1]。

本章で扱った文献中、呉音は訓点資料・抄物を問わず幅広い文献に出現していた。ただし、訓点資料には、漢音と呉音とが清濁のみで対立するような例に集中して呉音例が見られ、抄物ではそれに限らず、呉音例が出現していると言える。

漢音資料でありながら呉音例が多く混入すると言われる『大慈恩寺三蔵法師伝』（院政期点・鎌倉初期点）では、漢音と呉音とが清濁のみで対立する例に限らず、呉音例が出現している。その点で、清原宣賢遺文の漢籍訓読資料は、『大慈恩寺三蔵法師伝』と状況を異にする。

清原宣賢遺文の漢籍訓読資料の中で、『胡曾詠史詩注』本文部分は、『大慈恩寺三蔵法師伝』に近いと考えられる。『胡曾詠史詩注』本文部分には、仮名音注加点数が 110 例に過ぎない。しかし、この 110 例の中に、明母字がマ行となる呉音例が存する。『胡曾詠史詩注』は、『春秋経伝集解』『毛詩鄭箋』『中庸章句』などの経書よりも、呉音を含みやすいと推測できる。ただしこの点については、経書以外の漢籍の調査範囲を拡大し、調査する必要がある。

なお清原宣賢遺文において、漢音と呉音が清濁のみで対立するような呉音形が出現するのは、そのような字の漢音形が衰退したためと考えられる。漢音形が衰退したと考えられる例を除くならば、呉音は漢籍訓読資料に少なく、抄物に多いことが確認できる。

第二章　韻母の体系

第二章では、中国語中古音の韻母と、日本漢字音の韻母を対照させた。鎌倉時代以降の変化を考慮しつつ、清原宣賢遺文の韻母の特徴をまとめる。

1　サ行子音の摩擦音化、「チ」「ヂ」「ツ」「ヅ」の破擦音化など、子音の音価は、平安鎌倉時代と相違しているであろう。ただし、これは先行研究にもとづいて想定した作業仮説において言えることであるため、ここでは取り上げなかった。

①合拗音

ア列のみ。イ列・エ列はなし。

②オ段長音

清原宣賢遺文における「㋐ウ」形表記の連母音は、/-oʀ/と考えた。

③「㋓ウ」形の連母音と「㋑ヨウ」形拗音

「㋓ウ」形の連母音を、/-jou/と考えた。しかし、表記上はア行（ヤ行）に「ヨウ」、他の行は全て「㋓ウ」に集中する。このような状況は、鎌倉時代の経書から既に存在したらしい[2]。ただし、本章では、「㋓ウ」表記されるべきサ行子音の例などにおいて、「㋑ヨウ」形の出現を指摘した。これについては、頭子音ごとに音声的な相違があるためと考えた。

④「㋑ウ」形の連母音

「㋑ウ」形の連母音は融合していたものと考え、/-juʀ/を想定した。

⑤韻尾

・-m 韻尾、-n 韻尾

鎌倉時代以降の変化を受け、両者は合流したことを反映している。また、室町時代では和語の撥音と区別がないと考えられるので、/-ɴ/と解釈した。

・-ŋ 韻尾

清原宣賢遺文において口母音化しており、/-u/となっている。

・-p 韻尾

ハ行転呼音により/-u/へと変化している。実際には先行する母音と融合し、音韻論的にはさまざまに解釈できる。

・-t 韻尾

清原宣賢遺文でも/-t/と考えられる。ただし、「一」「七」「八」「埒」など、/-ti/のように二音節になっているものも存する。

・-k 韻尾

二音節となっていたと考え、/-ku/と解釈した。

以上のように、清原宣賢遺文に見られた字音体系は、鎌倉時代からの変化を反映したものとして把握でき、日本漢字音史への位置づけができる。このことは、清原宣賢遺文の、言語資料としての活用可能性を示す。

清原宣賢遺文に見られた文献ごとの差としては、次のものが挙げられる。まず、漢籍訓読資料では漢音を、抄物では呉音・鎌倉宋音を含む複数の字音体系を使用していた。この点で、第一章でみた声母の状況と一致している。また、使用字音系統の違いに留まらず、漢籍訓読資料と抄物とで、許容される語形が異なっていた。例えば、『孝経秘抄』において出現する「科斗」という語は、『孝経秘抄』本文で「クワトウ」、『孝経秘抄』抄物で「グワト」という字音点がそれぞれに加えられている。使用字音系統などを含む、資料種ごとの語形の相違について、漢籍訓読資料と抄物という対立をなすのか、経書とそれ以外という対立をなすのか、本章の記述ではわからなかった。

第三章　声調の体系

第三章では、調類（平声・上声・去声・入声のいずれかに分けられる、分類）と調値（実際の音調）とを分け、それぞれを記述した。

第一節では、清原宣賢遺文における字音声点を資料として、声点が示す調類と中国語中古音との対照を試みた。ここでは、『春秋経伝集解』『毛詩鄭箋』に加点された声点を主たる資料として、『孝経秘

2　佐々木勇『平安鎌倉時代における日本漢音の研究』研究篇（2009 年、汲古書院）219 頁。

抄』本文・注釈に加点される声点も補助的に使用した。

その結果、以下のことを指摘した。

①『春秋経伝集解』『毛詩鄭箋』が反映する声点は、大部分が漢音声調と一致する。『孝経秘抄』本文に加点される声点も、漢音声調を反映する。

②『孝経秘抄』注釈の例を含めて考えれば、漢籍訓読資料では漢音読、とくに字音の制限がない資料では複数の字音体系を使用する、ということが、声調についても確認できる。

③『春秋経伝集解』『毛詩鄭箋』では、中古音全濁上声字に対して、去声点を加点する割合が上声点を加点する割合よりも多い。この点は、鎌倉時代に清原家で加点された『春秋』『毛詩』において、上声点と去声点とが半数程度ずつであるという指摘と異なっている。

④『春秋経伝集解』『毛詩鄭箋』において、軽音節去声字が上声化する現象は、観察されない。

以上の点から、次のことが言える。

まず、鎌倉時代から室町時代に時代が変わる中で、全濁上声字への上声点加点が減少する。去声化した上声全濁字を、韻書などによって上声化しようとする営みが、鎌倉時代よりも室町時代の方が盛んではなかった、と考えられる。

一方、軽音節去声字に対して上声化傾向が見られないのは、漢籍訓読資料において、受け継がれてきた声調を引き継ごうとしたためであろう。

第二節では清原宣賢遺文に見られる「声」注記を利用し、字音声調の調値の推定を行った。対象資料としたのは、「声」注記の存する、京都大学附属図書館清家文庫蔵『論語』と、大東急記念文庫蔵『孝経秘抄』本文部分である。推定の結果、平声＝ＨＬ（下降調）、去声＝ＬＨ（上昇調）という調値を得られた。この調値は、和語の体系変化の影響を受けたものと解釈できる。

さらに、二字漢語を構成する場合、必ずしも単字の調値の組み合わせによって実現するわけではないことも明らかになった。その調値実現は、和語のアクセントの体系変化を反映する「出会」を起こしたものであった。

第四章　第一部のまとめ

第四章では、第一部のまとめを行った。

音形に関して見る限り、漢籍訓読資料対抄物という対立をなす。その対立は、呉音出現のしかたの差や、-t 入声の実現音の差、長音化する語の差、日常的語形の出現の有無などに見られた。

また声調についても、漢籍に加点される声点は主として漢音声調を反映し、抄物に加点される声点は必ずしも漢音声調を反映しないことを指摘した。

声調については、声点や「声」注記自体が特定の文献に偏るため、経書＝漢音声調、抄物＝漢音声調に限らない声調、という、粗い記述となってしまった。ただし、この注記の分布も特徴的である。声点は『春秋経伝集解』『毛詩鄭箋』のような経書に出現し、「声」注記は『論語』『孝経秘抄』本文のような、初学者用に加点された資料に見られた。『春秋経伝集解』『毛詩鄭箋』のような資料では、加点された声点をもとに、「出会」などを考慮して修正しながら漢音声調を実現したと想像されるため、両者に調値の相違はなかったかもしれない。しかし、『春秋経伝集解』『毛詩鄭箋』のような経書では声点を、初学者用の経書では日常語を使用した分かりやすい声調注である「声」注記を使用している点で、表記的な位相差が現われている、と考えることもできよう。

以上、第一部では、複数の資料を同一の枠組みで取扱い、全体としての体系を記述した。その中で主に、漢籍訓読資料と抄物との間における位相差を指摘した。

第二部　室町時代における日本漢字音の位相論的研究――清原宣賢遺文を中心に――

第一章　清原宣賢加点漢籍訓読資料における字音点の多様性

本章では、清原宣賢加点の漢籍訓読資料に調査範囲を限定した。対象とした資料は、宮内庁書陵部

・京都大学附属図書館清家文庫蔵『春秋経伝集解』巻２・巻１１―３０、京都大学附属図書館清家文庫蔵『中庸章句』、京都大学附属図書館清家文庫蔵『六韜』、阪本龍門文庫蔵『長恨歌伝・琵琶行』であった。この調査によって、次のことが知られた。

１．反切・同音字注や声点の有無や、各音注の機能に、差が生じていた。特に声点について、『春秋経伝集解』では声調と清濁をともに示す古くからの形式を保つのに対し、他の資料では濁点が仮名に加点されていたり、声点が濁音卓立標示であったりと、新しい特徴を示していた。

２．漢音読を基本とする漢籍訓読資料であっても、本章で対象とした全ての資料に呉音で読まれる語があった。その呉音で読まれる語に、資料ごとの差があった。『春秋経伝集解』や『中庸章句』では一般名詞・漢語サ変動詞（・固有名詞）において呉音例が認められた。その一方、『六韜』や『長恨歌伝・琵琶行』では、一般名詞・漢語サ変動詞に加えて、形容動詞をも呉音読する例が認められた。このように、「経書対それ以外」という対立をなす。

３．字音点加点に際して、反切・同音字注がどのように影響するかを確かめた。すると、反切・同音字注の積極的な利用は『春秋経伝集解』『中庸章句』にとどまっていると考えられた。また人為的漢音は、『春秋経伝集解』でのみ確認された。『六韜』では、全体として反切・同音字注に基づかない傾向にあり、『長恨歌伝・琵琶行』では反切・同音字注自体を参照していない、と考えられた。

４．入声韻尾の促音表記については、『中庸章句』に多く促音表記が認められた。ただし、これは表記の問題であろう。『中庸章句』のみに促音表記が見られるのは、奥書にある「子孫」のために、より表音的な加点を行ったものであろう。『六韜』にも存疑例ではあるものの、促音表記例は存した。これは、加点される字音点自体の表音性の程度差による、と考えられる。

「２」「３」の項目については、「経書対それ以外」という対立が確認された。このような対立は、音注加点にあたって、どの程度注釈書に支えられた規範的な漢音を使おうとするか、という差に基づく。経書はより規範的な漢音を使用し、それ以外の漢籍訓読資料では経書に比べ、注釈書に支えられた漢音を使うという規範が弛緩した加点をした、と考えられる。

「４」では、促音化した入声韻尾に対して、どの程度表音的に表記するか、という差が生じていた。表音的に表記した『中庸章句』は、「子孫」のために表音性を重視したものと考えられる（『六韜』も、清原良雄筆であることを考えると、同様のことが言えるかもしれない）。

これと軌を一にし、「１」のように『中庸章句』『六韜』では特に新しい形式の音注加点が為されていた。つまり、字音点をわかりやすく伝えるためには、声点など、初学者には修得困難な音注を削除し、さらに表音的な字音点を加点する、と考えられる[3]。

以上から、規範性の差と資料の目的差によって、本章で扱った四資料には、加点される字音点の多様性が生じたもの、と考えられる。

第二章　清原宣賢遺文における呉音・漢音・鎌倉宋音

第二章では、清原宣賢遺文の呉音・漢音・鎌倉宋音の使用状況について調査した。使用状況を調べるための資料として、清原宣賢自身による字音使用に関する記述と、実際の字音表記を手がかりとした。その結果、次のことが知られた。

まず、第二章の調査範囲で、典籍の種類と字音の使用状況（漢音読・呉音読・混読）とを対照させてみると、次のようになる。

漢音読：漢籍（人名・書名を含む）

３　『中庸章句』には本稿で取り上げた音注以外に、被注字に直接「清」「濁」と注記する注音方法が存する。これも、表音性と合わせて考えるべき問題かもしれない。

呉音読：仏典
混読　：神道書、抄物、人名、書名

これは、これまで知られてきた字音の使用状況と多くの部分が一致する。しかし、人名・書名は漢籍の講読で漢音読されることを指摘した点が異なる。また、神道書の字音使用の位置づけも、本章の検討により可能になった。

次に、漢籍に呉音例が出現する場合を、漢音形が使用できなかった場合（漢音形が衰退した場合）と、漢音形が使用できた場合（衰退していない場合）とに分けた。漢音形が使用可能であった場合については、経書よりも経書以外の漢籍において、呉音が出現しやすいことが確認出来た。

鎌倉宋音の使用について、漢籍における鎌倉宋音の使用例は、禅僧が関わった典籍に出現した。また、抄物における鎌倉宋音の使用例は、日常的に使用される語にとどまり、鎌倉宋音の字音形態素は造語力を有していなかった。この点で、漢籍の鎌倉宋音と、抄物の鎌倉宋音とでは、出現する動機が異なる。

このように本章では、各資料種における使用字音体系の確認を行うとともに、例外的なものの出現傾向について調査した。一個人の資料でも、資料によって、多様な字音系統が使用されていることが確認できたことが、本章における成果である。

第三章　清原宣賢遺文における漢音形の衰退について

第三章では、清原宣賢遺文の漢音資料における呉音形の分布について、漢音形の衰退という観点から調査を行った。対象として、「所」「初」「廢」の三字を選択し、その漢音形（所：ソ、初：ソ、廢：ヘイ）・呉音形（所：シヨ、初：シヨ、廢：ハイ）の出現状況を調査した。

宣賢の漢音資料には漢音形と呉音形が並存し、混読資料（漢音・呉音・鎌倉宋音等の字音が混ずる資料）には呉音形のみが出現する。しかし、漢音資料でも漢音形が現れるのは移点資料に集中する。

本章で対象とした字について、平安鎌倉時代の漢音資料では漢音形が使用されたと考えられる。しかし平安鎌倉時代の混読資料では呉音形が優勢であった。平安鎌倉時代の資料の状況から、混読資料における呉音形への一音固定化が、漢音形の衰退を引き起こしたと考えられる。

時代が降るにつれて混読資料における一音固定化は進行し、本章で扱った字は呉音読に固定した。その結果、使用頻度の低くなった漢音形は衰退し、呉音形の使用は漢音資料にも広がった。清原宣賢遺文では移点の影響がある資料に限って漢音形が出現することから、宣賢は既に漢音形を習得していなかったと考えられる。

しかし移点の影響がある資料でも表記のみ漢音形を残したのではなく、発音上も漢音形を残す（『孝経秘抄』の「所・シヨト不讀」）。移点の底本の形を引き継ぎ、宣賢の時代としては特殊な語形を採用することにより、読みの「正当性」を担保しつつ、同時代他文献との読みの差異化を図る。これにより、威信を高める目的があったと考えられる。

第四章　室町時代における「数」の漢音形について

第四章では、「数」字の漢音形を取り上げた。平安鎌倉時代において「数」字の漢音形は、一拍の/tsu/であった。第四章ではこのことを確認した上で、以下のことを述べた。

①「数」の漢音形は、「—数」の場合と単字の場合に、南北朝期以降/su/＞/suʀ/の変化が起こった。
②「—数」の場合と単字の場合に起こった/su/＞/suʀ/の変化は、上昇調によって長く発音されたことに起因する。「数—」と「—数」「数」には意味の相違が存したために、音韻論的な拍数の相違として定着した。
③室町後期には、宣賢書写本において「数—」の場合にも/suʀ/が出現していた。
④「数—」の場合の/suʀ/は広がりをもつものではなく、訓点資料のみに見られた。これは、学問的な反省によって/suʀ/が選択されたものと思われる。

このように、「数」字の音形の変化と、室町時代における位相的な相違（訓点資料に「数—」の/suʀ/

が出現すること）を指摘した。

第五章　一個人内における-t入声音の位相差――「一」「七」「八」「實」について――

第五章では、宣賢書写本において、-t 入声音に対して朱点で発音の注記が付される「一」「七」「八」「實」字について、宣賢書写本全体に対象を広げて調査した。

その結果、次の結果を得た。

まず、「一」「七」「八」における-t 入声表記は、経書で「―ツ」、それ以外の文体で「―チ」が主たるものであった。これは、経書の「―ツ」表記が他の文体と比べて特異であることを示している。「一」「七」「八」字について、経書では、発音に上も/-t/が中心であったと考えられる。また経書以外の文体では/-ti/が中心であったと考えられる。

「實」字は、経書以外でも全体として「―ツ」表記が優勢であった。これは、実際に/-t/と発音されたためと考えられる。

以上、清原宣賢遺文において、「一」「七」「八」字で、一個人の-t 入声の発音の位相差を指摘できた。その位相差とは、経書とそれ以外の文体との間における、-t 入声の実現の相違であった。

また、文語キリシタン資料・口語キリシタン資料を参照した結果、清原宣賢遺文において見られた「一」「七」「八」字の入声音としての実現は、ほとんど確認できなかった。これより、清原宣賢遺文の経書では、キリシタン資料以上に-t 入声を/-t/と発音しようとしていた、と考えられる。

清原宣賢遺文の経書における、「一」「七」「八」字の-t 入声の/-t/は、平安鎌倉時代の漢籍訓読における発音を残している可能性という通時的解釈と、同時代における訓点の権威付けという、共時的な解釈の両面から、意味づけが可能なものであった。

第六章　第二部のまとめ

第六章では、第二部のまとめを行った。

第二部各章の概観を行い、第二部全体としては、大きく漢籍訓読資料とそれ以外の対立を記述できたと考えた。この点で、第一部と同様の成果を得られたと考えられる。これに加え、漢籍訓読資料内では、人為的漢音のような学問的な字音使用と、呉音のような規範から外れる字音の使用について、経書対それ以外の漢籍という対立を指摘することができた。

結章

結章では本研究全体の総括を述べた。

まず、本研究の成果として、室町時代における日本漢音体系の記述を行った点が挙げられる。また本研究における体系記述には、可能な限りの音韻論的解釈を行った。問題点も多いものの、音韻的解釈を行うことで見えてくる現象・課題も多かった。

次に、室町時代における日本漢字音の位相差の指摘が挙げられる。本研究により、室町時代において日本漢字音の位相差が存したことが明らかになった。清原宣賢一個人の文献に見られた位相は、文献の種類によって整理すれば、漢籍訓読資料対抄物という、大きな対立を想定できる。さらに、漢籍訓読資料内では、経書と経書以外の漢籍という対立を想定することができる。

ただしその対立には、複数の種類のものが存する。漢語の音と和語の音との融和の程度差（-t 入声の発音の差)、日本語の中における音形変化の受容の差（「数」字の漢音形/su/と/suʀ/の、語構成における出現の仕方の差)、各場面における字音体系同士の影響（漢籍訓読資料における呉音・鎌倉宋音の出現、漢音形の衰退）など、単一の現象ではなく、複数のものを含んでいる。

以上の点は、室町時代における学問的な字音使用と、日常的な字音使用との間の相違を指摘しえたものと考えられる。またその相違は、古形を留めやすい漢籍と、相対的に新形を取り入れやすい日常の漢語といった文体的な対立であるとともに、漢籍における権威向上をはかる、社会的な要因も、同時に関わっているものと考えられる。

次に、本研究における課題である。

まず、研究対象資料範囲拡大の必要性が挙げられる。清原宣賢の字音をより明らかにするためには、今後、清原宣賢遺文全体を扱うことが、今後必要となろう。また、室町時代の日本漢字音研究を目指すには、同時代文献に目を向け、対象範囲をさらに広げる必要がある。また字音体系としても、漢音以外の字音体系に視野を広げる必要がある。今後、清原宣賢一個人の資料を対象とする研究から、同時代の字音資料を幅広く利用した研究への発展が必要であると考える。

次に、清原宣賢遺文における字音の形成過程の解明が挙げられる。先行研究によって知られてきた平安鎌倉時代の字音体系と、清原宣賢遺文により知られた字音体系の間には、少なからぬ時代の開きがある。その間を埋めるには、南北朝期から室町時代中期頃の字音資料が必要になる。しかし、南北朝時代以降の字音資料は、未だ未開拓な段階であると言ってよい。南北朝期から室町時代中期の字音資料を調査し、字音の記述を行う必要があろう。その際、平安鎌倉時代における先行研究の蓄積と、本研究とのそれぞれを、歴史上に位置づけながら研究を行うことが必要であると考える。

最後に、方法的な洗練の必要性が挙げられる。本研究では体系記述を行うために清原宣賢の音韻体系を仮構し、字音体系の記述にも使用した。しかし、その音韻体系も、推定される音価自体も、判断に迷う点が多く不明な点が多い。日本語音韻史研究・日本漢字音史研究の両面から、多くの点を修正し、さらに追求する必要がある。また本研究では、用例数をほとんど問題にしていない。そのため、それぞれの文献の用例数中の異例の割合の算出など、数量的な観点からの記述を行うことができていない。さらに、本研究で扱った現象の一つに、字音体系相互の影響がある。本研究を行ううちに、字音体系相互の影響を研究するためには、日常的な位相の漢字音研究が必要であると感じるようになった。しかし、日常的位相の漢字音研究は、その全体像をとらえるための研究方法も確立されていないと言える。研究手法の模索を続けたい。

５．参考・引用文献、URL

（１）著書・論文

足利衍述『鎌倉室町時代之儒教』（1932 年、日本古典全集刊行會）

有坂秀世『国語音韻史の研究　増補新版』（1957 年、三省堂）

安野博之「室町期における「長恨歌・琵琶行」享受――二つの宣賢自筆本をめぐって――」（『国語国文』第 68 巻第 9 号　1999 年 9 月、京都大学文学部国語学国文学研究室）

石山裕慈「論語古写本における漢字音について」（『日本語学論集』第 4 号　2008 年 3 月、東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室）

石山裕慈「高山寺本『荘子』の漢字音」（『弘前大学教育学部紀要』第 107 号　2012 年 3 月、弘前大学教育学部）

石山裕慈「室町時代における漢字音の清濁――『論語』古写本を題材として――」（『弘前大学教育学部紀要』第 108 号　2012 年 10 月、弘前大学教育学部）

石山裕慈「『遊仙窟』各本に記入された日本漢字音の位置づけ」（『国語と国文学』第 90 巻第 7 号　2013 年 7 月、東京大学国語国文学会）

石山裕慈「漢音声調における上声・去声間の声調変化――日本漢文の場合――」（『国文論叢』第 48 号　2014 年 3 月、神戸大学国語国文学会）

出雲朝子「成簣堂本論語抄におけるオ段拗長音の表記について」（『未定稿』第 9 号　1961 年 9 月、未定稿の会）

伊藤智ゆき『朝鮮漢字音研究』（2006 年、汲古書院）

今泉忠義『日葡辭書の研究　字音』（1969 年、桜楓社）

岡本　勲『日本漢字音の比較音韻史的研究』（1991 年、桜楓社）

小倉　肇『日本呉音の研究』研究篇（1995 年、新典社）
小倉　肇『日本語音韻史論考』（2011 年、和泉書院）
小倉　肇『続・日本呉音の研究』研究篇（2014 年、和泉書院）
上野和昭『平曲譜本による近世京都アクセントの史的研究』（2011 年、早稲田大学出版部）
上野和昭「『名目抄』所載の漢語に差された声点について――漢語アクセント史構築のために――」（『国文学研究』第 168 号　2012 年 10 月、早稲田大学国文学会）
宇都宮睦男「阪本龍門文庫蔵清原宣賢筆「長恨歌并琵琶行」の訓点」（『鈴峯女子短期大学人文社会科学研究集報』第 26 集　1979 年 12 月、鈴峯女子短期大学）
宇都宮睦男「京都大学図書館蔵「長恨歌幷琵琶行」の訓点」（『国語教育研究』第 26 号上　1980 年 11 月、広島大学教育学部光葉会）
江口泰生「「シウ」・「シユ」・「シユウ」」（『文獻探求』1986 年 9 月、文献探求の会）
奥村三雄「音節とアクセント――呉音聲調の國語化――」（『国語国文』第 22 巻第 11 号　1953 年 11 月、京都大学文学部国語学国文学研究室）
奥村三雄「音韻とアクセント――アクセント研究の意義――」（『国語国文』第 27 巻第 9 号　1958 年 9 月、京都大学文学部国語学国文学研究室）
柏谷嘉弘「図書寮本文鏡秘府論の字音声点」（『国語学』第 61 集　1965 年 6 月、国語学会）
柏谷嘉弘『日本漢語の系譜―その摂取と表現―』（1987 年、東宛社）
加藤大鶴「アクセントの体系変化前後に見る漢語アクセントの対応― 2 字 2 拍・2 字 4 拍の漢語を中心に―」（『論集』第 11 号　2016 年 2 月、アクセント史資料研究会）
川瀬一馬『増補新訂　足利学校の研究』（1974 年、講談社）
川瀬一馬『龍門文庫善本書目』（1982 年、阪本龍門文庫）
菊澤季生「國語の科學的研究に就て」『國語教育の科學的研究』（1933 年、厚生閣書店）
菊澤季生『國語位相論』（1933 年、明治書院）
来田　隆『抄物による室町時代語の研究』（2001 年、清文堂出版）
木田章義「『補忘記』の入声」（『均社論叢』第 10 号　1981 年 10 月、均社）
木田章義「国語音韻史上の未解決の問題」（『音声研究』第 4 巻第 3 号　2000 年 12 月、日本音声学会）
金田一春彦「日本四声古義」（『国語アクセント論叢』1951 年、法政大学出版局。1954 年の再販に依る）
金田一春彦『金田一春彦著作集　第 7 巻』（2005 年、玉川大学出版部）
河野六郎『河野六郎著作集　第二巻』（1979 年、平凡社）
古勝隆一「新しくなった清家文庫」（『静脩』第 40 巻第 1 号　2003 年 5 月、京都大学附属図書館）
国語学会『国語学大辞典』（1980 年、東京堂出版。1981 年の再版に依った）
国立国語研究所『現代雑誌九十種の用語用字』第三分冊（1964 年、国立国語研究所）
五島和代「イウからユウ（ユー）音へ」（『国語学』第 51 巻第 3 号　2000 年 12 月、国語学会）
小林千草「清原宣賢」（『日本語学』」第 35 巻第 4 号　2016 年 4 月、明治書院）
小林芳規「鎌倉時代語史料としての草稿本教行信証古点」（『東洋大学大学院紀要』第 2 集　1965 年 9 月、東洋大学大学院）
小林芳規「中世片仮名文の国語史的研究」（『広島大学文学部紀要』特輯号 3　1971 年 3 月、広島大学文学部）
小松英雄「日本字音における唇内入声韻尾の促音化と舌内入声音への合流過程――中世博士家訓点資料からの跡付け――」（『国語学』第 25 号　1956 年 7 月、国語学会）
坂水貴司「清原宣賢自筆『日本書紀抄』（後抄本）の漢字音―本文と注釈との比較から―」（『論叢国

語教育学』復刊第 3 号　2012 年 7 月、広島大学大学院教育学研究科国語文化教育学講座）
坂水貴司「清原宣賢加点『春秋經傳集解』の反切注について」（『広島大学大学院教育学研究科紀要　第 2 部　文化教育開発関連領域』第 63 号　2014 年 12 月、広島大学大学院教育学研究科）
坂水貴司「清原宣賢加点漢籍訓読資料における字音点の多様性」（『訓点語と訓点資料』134 輯　2015 年 3 月、訓点語学会）
坂水貴司「清原宣賢と清原枝賢の字音点の相違について―『論語』『中庸章句』を資料として―」（『広島大学大学院教育学研究科紀要　第 2 部　文化教育開発関連領域』第 64 号　2015 年 12 月、広島大学大学院教育学研究科）
坂水貴司「清原宣賢書写本に見る漢音形の衰退について」（『国文学攷』第 231 号　2016 年 9 月、広島大学国語国文学会）
坂水貴司「室町時代における「数」の漢音形について」（『訓点語と訓点資料』第 138 輯　2017 年 3 月刊行予定、訓点語学会。印刷中）
桜井茂治「「出会」考」（『国語研究』第 7 号　1958 年 1 月、国学院大学国語研究会）
佐々木勇「親鸞筆『教行信証』の漢音―出現箇所と加点理由―」（『広島大学学校教育学部紀要　第 2 部』第 19 巻　1997 年、広島大学学校教育学部）
佐々木勇『平安鎌倉時代における日本漢音の研究』研究篇（2009 年、汲古書院）
佐々木勇「鎌倉時代における漢字音の個人差――親鸞と恵信尼との比較――」（月本雅幸・藤井俊博・肥爪周二編『古典語研究の焦点　武蔵野書院創立九〇周年記念論集』2010 年 1 月、武蔵野書院）
佐々木勇「親鸞と明恵の漢字音―漢字片仮名交じり文における比較―」（『広島大学大学院教育学研究科紀要　第 2 部　文化教育開発関連領域』第 59 号　2010 年 12 月、広島大学大学院教育学研究科）
佐々木勇「専修寺蔵『入出二門偈頌』建長八年真佛写本の訓点について」（『ことばとくらし』第 23 号　2011 年 10 月、新潟県ことばの会）
佐々木勇「中世浄土真宗資料に見られる急・緩入声点と舌内入声音」（『広島大学大学院教育学研究科紀要　第 2 部（文化教育開発関連領域）』第 106 号　2011 年 12 月）
佐々木勇「親鸞使用の声点加点形式について――板東本『教行信証』声点の位置づけ――」（『訓点語と訓点資料』第 129 輯　2012 年 9 月、訓点語学会）
佐々木勇「鎌倉時代における呉音声調の位相差――親鸞加点本を資料として――」（『国語国文』第 82 巻第 1 号　2013 年 1 月、京都大学文学部国語学国文学研究室）
佐々木勇「鎌倉時代における呉音の諸相―親鸞遺文を資料として―」（『論叢国語教育学』第 11 号　2015 年 7 月、広島大学大学院教育学研究科国語文化教育学講座）
佐藤喜代治『日本の漢語―その源流と変遷―』（1979 年、角川書店）
高田時雄『敦煌資料による中國語史の研究』（1988 年、創文社）
高山倫明「連濁と連声濁」（『訓点語と訓点資料』第 88 輯　1992 年 3 月、訓点語学会）
高山倫明『日本語音韻史の研究』（2012 年、ひつじ書房）
竹村明日香「ローマ字本キリシタン資料のオ段合拗長音表記――抄物の表記との対照を通して――」（『語文』第 96 号　2011 年 6 月、大阪大学国語国文学会）
築島　裕『興福寺本大慈恩寺三藏法師傳古點の國語學的研究』（1965 ― 1967 年、東京大學出版會）
築島　裕『平安時代語新論』（1969 年、東京大學出版會）
土井忠生『吉利支丹語学の研究　新版』（1971 年、三省堂）
豊島正之「「開合」に就て」（『国語学』第 136 集　1984 年 3 月、国語学会）
中田祝夫『古點本の國語學的研究』總論篇（1954 年、大日本雄辯會講談社）

中村春作「五山のゆくえ――思想史研究の視点から」（島尾新『東アジアのなかの五山文化』2014年、東京大学出版会）
沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』（1982年、武蔵野書院）
沼本克明『日本漢字音の歴史』（1986年、東京堂出版）
沼本克明「字音假名遣いについて」（『日本漢字音史論輯』1995年、汲古書院。初出、"ACTA ASIATICA" 第65号　1993年8月、東方学会）
沼本克明『日本漢字音の歴史的研究――體系と表記をめぐって――』（1997年、汲古書院）
沼本克明『帰納と演繹とのはざまに揺れ動く字音仮名遣いを論ず――字音仮名遣い入門――』（2014年、汲古書院）
橋本進吉『橋本進吉博士著作集第十1冊　キリシタン教義の研究』（1961年、岩波書店）
服部四郎『言語学の方法』（1960年、岩波書店）
早川光三郎『新釈漢文体系　第59巻　蒙求（下）』（1973年、明治書院）
林　史典「呉音系字音における舌内入声音のかな表記について」（『国語学』第122号　1980年9月、国語学会）
早田輝洋「日本語の音韻とリズム」（『伝統と現代』通巻第45号　1977年5月、伝統と現代社）
早田輝洋「上代日本語の音韻をめぐって（上）」（『言語』第25巻第9号　1996年、大修館書店）
肥爪周二「ウ列開拗音の沿革」（『訓点語と訓点資料』第107輯　2001年9月、訓点語学会）
肥爪周二「拗音仮名「茶（茶）」をめぐって」（『茨城大学人文学部紀要　人文学科論集』第39号　2003年3月、茨城大学）
肥爪周二「撥音史素描」（『訓点語と訓点資料』第120輯　2008年3月、訓点語学会）
平山久雄「敦煌毛詩音残巻反切の研究（上）」（『北海道大學文學部紀要』第14巻第3号、1966年、3月、北海道大学文学部）
平山久雄「唐代音韻史における軽唇音化の問題」（『北海道大學文學部紀要』第15巻第2号　1967年3月、北海道大学文学部）
平山久雄「中古漢語の音韻」（『中国文化叢書1　言語』初版1967年、大修館書店。1981年の第5版に依った）
福島邦道「遊仙窟の「玳瑁」の訓について」（『訓点語と訓点資料』第32輯　1966年2月、訓点語学会）
松井利彦「近世漢学における漢字音の位相」（『国語国文』第40巻第5号　1971年5月、京都大学文学部国語学国文学研究室）
三沢諄治郎「「馬」の字音について」（『甲南女子大学研究紀要』第2号　1965年3月、甲南女子大学）
満田新造『中国音韻史論考』（1964年、武蔵野書院）
三根谷徹『中古漢語と越南漢字音』（1993年、汲古書院）
柳田征司『室町時代語を通して見た日本語音韻史』（1993年、武蔵野書院）
柳田征司『日本語の歴史5下　音便の千年紀』（2015年、武蔵野書院）
湯沢質幸『唐音の研究』（1987年、勉誠社）
米山寅太郎「毛詩鄭箋解題」（『古典研究會叢書　漢籍之部　第三巻　毛詩鄭箋（三）』（1994年、汲古書院）
若松由美「日本漢字音における慣用音の研究」（『言語科学研究　神田外語大学大学院紀要』第5号　1999年3月、神田外語大学大学院）

（2）資料・影印本等

秋永一枝他『日本語アクセント史総合資料　索引編』（1997年、東京堂出版）

池田利夫『蒙求古註集成　上巻』（1988 年、汲古書院）
上野和昭『補忘記貞享版元禄版影印ならびに声点付漢字索引』（2016 年、アクセント史資料研究会）
北　恭昭「国立国会図書館蔵　百舌往来　解説・翻刻」（『訓点語と訓点資料』第 50 輯　1973 年 3 月、訓点語学会）
佐々木勇「親鸞筆『佛説阿彌陀經』『佛説觀無量壽經』被字音注漢字索引」（『比治山女子短期大学紀要』第 27・28 号・29 号、1992 年 10 月・1993 年 3 月・1994 年 3 月、比治山学園比治山女子短期大学）
築島　裕『長承本　蒙求』（1990 年、汲古書院）
築島　裕『高野山西南院藏本和泉往來總索引』（2004 年、汲古書院）
土井忠生訳『日本大文典』（1955 年、三省堂。同年刊行の再版による）
土井忠生他『邦訳日葡辞書』（1980 年、岩波書店）
中田祝夫『改訂新版　古本節用集六種研究並びに綜合索引　影印篇』（2009 年、勉誠出版）
沼本克明「高山寺蔵理趣経鎌倉期点解説並びに影印」（『鎌倉時代語研究』第 6 輯　1983 年 5 月、鎌倉時代語研究会）
日埜博司『コリャード懺悔録―キリシタン時代日本人信徒の肉声―』（2016 年、八木書店）
東辻保和「安田八幡宮蔵「大般若波羅蜜多經の音注（資料）」（『訓点語と訓点資料』第 44 輯　1971 年 6 月、訓点語学会）
北京大学中国語言文学系語言学教研室『漢語方音字滙』（第 2 版重排本、2003 年、語文出版社）
龍　于純『韻鏡校注』（1976 年、藝文印書館）
『天草版イソポ物語』（1976 年、勉誠出版。2012 年の第 13 版を参照した）
『天草版平家物語』（1994 年再版、勉誠社）
『清原宣賢漢籍抄物翻印叢刊　1　大学聴塵』影印之部（2011 年、汲古書院）
『清原宣賢自筆伊路波分類體辭書　塵芥』（1972 年、臨川書店）
『金句集四種集成　勉誠社文庫∞』（1977 年、勉誠社）
『経典釈文　附校勘記』（1972 年、中文出版社）
『建武四年鈔本　論語』（1938 年、蒲田政治郎）
『元亀二年京大本運歩色葉集』（1969 年、臨川書店。1988 年再版）
『高山寺古辭書資料第二』（1983 年、東京大學出版會）
『古典研究會叢書漢籍之部　第九巻　群書治要（一）』（1989 年、汲古書院）
『古典籍索引叢書　第十三巻　醍醐寺藏本遊仙窟總索引』（1995 年、汲古書院）
『重要文化財　ドチリーナ・キリシタン　天草版』（2014 年、勉誠出版）
『重要文化財　論語集解　正和四年写』（2015 年、勉誠出版）
『新校正切宋本廣韻』（1976 年、黎明文化事業公司）
『身延山久遠寺藏　重要文化財　本朝文粹』（1980 年、汲古書院）
『親鸞聖人真蹟集成第 5 巻』（1973 年、法藏館）
『親鸞聖人真蹟集成第七巻』（1973 年、法藏館）
『親鸞聖人真蹟集成第二巻』（1974 年、法藏館）
『宋刻集韻』（1989 年、中華書局。2005 年の第 2 版を参照した）
『續抄物資料集成　巻第六　山谷抄』（1980 年、清文堂出版）
『尊経閣善本影印集成∞　色葉字類抄　1　三巻本』（1999 年、八木書店）
『長恨歌并琵琶行清原宣賢筆』（阪本龍門文庫複製叢刊四　1962 年、龍門文庫）
『天理圖書館善本叢書和書之部第三十 2 ―三十四巻　類聚名義抄觀智院本　佛法僧』（1976 年、天理大學出版部）

『天理圖書館善本叢書和書之部　第二十七巻　日本書紀纂疏　日本書紀抄』（1977 年、天理大學出版部）
『天理圖書館善本叢書和書之部　第四十三巻　和歌物語古註集』（1979 年、天理大学出版部）
『東京大學國語研究室資料叢書第十五巻　古訓點資料集（一）』（1986 年、汲古書院）
『東方文化叢書第一　古鈔本　文鏡秘府論』（1930 年、東方文化学院）
『天正十八年本節用集』（2015 年、勉誠出版）
『日葡辞書』（1973 年、勉誠社。1975 年の再版に依った）
『日本文典』（1976 年、勉誠社）
『覆刻　日本古典全集　倭點法華經　下』（1978 年、現代思潮社。初出は 1934 年、日本古典全集刊行會）
『分類體辭書　宣賢卿字書』（1972 年、臨川書店）
『耶蘇会版「落葉集」総索引』（1978 年、笠間書院）
『論語抄』（1917 年、民友社）

（３）ＵＲＬ

・貴重書電子画像

京都大学人文科学研究所「東方學デジタル圖書館」
http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/toho/html/top.html（2017 年 1 月 13 日確認）

慶應義塾大学附属研究所斯道文庫・東京大学東洋文化研究所付属東洋学研究情報センター「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧―― 書誌書影・全文影像データベース ――」
http://db.sido.keio.ac.jp/kanseki/T_bib_search.php（2017 年 1 月 13 日確認）

京都大学附属図書館「京都大学電子図書館　貴重資料画像」
http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/index.html（2017 年 1 月 13 日確認）

国立国会図書館「国立国会図書館デジタルコレクション」
http://dl.ndl.go.jp（2017 年 1 月 13 日確認）

米沢図書館「米沢善本完全デジタルライブラリー」
http://www.library.yonezawa.yamagata.jp/dg/zen.html（2017 年 1 月 13 日確認）

・その他

常用漢字表（平成二二年内閣告示第二号）
http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kijun/naikaku/pdf/joyokanjihyo_20101130.pdf（2017 年 1 月 13 日確認）